

仁井田 一郎—栃木県のいちご栽培の功労者(足利市)—

仁井田一郎は1912年(明治45年)足利市に生まれ、栃木県のいちご栽培の導入や、いちごの新しい栽培方法の開発など、栃木県のいちご栽培の基礎を築きました。

戦後の栃木県の農業は稲作が中心でしたが、農家の所得は向上しませんでした。そこで、農家の人たちは商品作物として麦、麻などを栽培しましたが、価格の低迷や化学繊維の進出などにより思ったような需要がなく、深刻な不安が起きました。

このような中、仁井田一郎は、農家の所得を上げ、豊かな町づくりをすすめるために、新しい作物として、いちご栽培の導入



仁井田一郎 (仁井田家提供)

を提案しました。当時栽培が盛んだった静岡県や神奈川県を訪ね、資料を手に入れ、現地の自然条件にあわせて栽培する方法を研究するなど、栃木県でいちご栽培を盛んにするために努力しました。栽培技術を学ぶために、自転車で現在の神奈川県海老名市へ2日がかかりで向かったというエピソードが残っています。

仁井田一郎のいちご栽培への取り組みが新聞等で報道されると、いちご栽培に関心のある人たちがたくさん訪ねてきました。仁井田一郎は、どのような時も喜んでいちご栽培の方法を教えました。また、市場の開拓にも力を入れました。東京に加え、北海道への出荷、新潟市場の開拓などを成功させました。栃木県のいちご栽培が盛んになりました。仁井田一郎が根付かせたいちご栽培は、県内各地に広がり、「女峰」や「とちおとめ」などの新品種の導入につながり、栃木県のいちごの生産量は1968年(昭和43年)からずっと日本一を誇っています。



日本一の生産量を誇る栃木のいちご
(スカイベリー栽培の様子)



現在のいちご栽培の様子(ハウス栽培)